

隣家の嫁

第五卷 美人妻の卑猥なヌードポーズ

前編

海老沢 薫 著

## 内 容

■ 著作権について

■ ま え が き

■ 第一章 白昼のヌード撮影会

■ 海老沢薫 B L O G

■ 海老沢薫 Web 連載小説

■ 著作権について

「隣家の嫁 第五卷 美人妻の卑猥なヌード  
ポーズ 前編」(以下本書と表記する)の著作  
権は「海老沢薫」にあります。

・ 本書のすべての内容は、日本の著作権法、  
及び国際条約によって保護されています。

・ 「海老沢薫」が事前に書面をもって許可し  
た場合を除き、本書の一部、または全部を、  
あらゆるデータ蓄積手段(印刷物、電子フア  
イル、ビデオ、テープレコーダー)により複  
製、流用、転載、転売することを固く禁じま  
す。

・ 著作権の侵害につきましては、著作権法第  
61条などの罰則がありますのでご注意ください  
い。

■ まえがき

マンションの集会で大勢のご近所さん達が  
見つめる中、一糸纏わぬ姿となり、痴態の限  
りを披露した美人妻の七海。  
家に戻った七海は、これからこのマンス  
ンでどんな顔して生きていけば良いのかも分  
からず不安と羞恥に打ち拉がれていた。  
すると翌朝、隣に住む主婦の坂下が七海の  
家を訪ねてくる。七海の恥ずかしい弱みを握  
り、昨夜の恥辱劇の首謀者でもある坂下は、  
七海をご近所さん達全員の奴隷にするべく、  
若妻のヌード撮影会を企画し、七海に午後  
自分の家に来るよう命じる。  
昨夜の悪夢が未だ覚めやらぬ中、七海は仕  
方なく覚悟を決めて、命令通り一糸纏わぬ姿  
で隣の坂下の家を訪ねた。  
坂下の家の中に入ると、なんとそこには同  
じマンションに住む二十人近いご近所の主婦  
達が集まっております、一糸纏わぬ姿の美人妻が

現れると、彼女達は目をギラギラと輝かせ、  
その体を舐め回すように見つめた。  
「まあ、本当にスッポンポンで来たの。やつ  
ぱり須藤さんて本物の露出狂なのね」  
「昼間から素っ裸でウロウロするなんて、最  
近の若い人は何を考えているんだか。でも、  
せっつかくだから今日はその体を良く見せてち  
ようだい！」  
「昨日もビツクリしたけど、須藤さんて滅茶  
苦茶スケベな体しているわねえ。これじゃあ  
撮影のし甲斐があるわ」  
ご近所さん達はすっかり興奮した様子で七海  
にスマホを向けると、美人妻のヌードを目を  
血走らせながら撮影し始めた。  
「須藤さん、とりあえず両手を頭の後ろで組  
んで、その大きなオツパイを良く見せてちよ  
うだい！」  
「須藤さん、そんな恐い顔してないで笑って  
くれる」

「須藤さん、今度は昨日集会所で見せてくれたガニ股ポーズをお願いできるかしら」

「須藤さん、次はお尻を突き出して後ろを振り返ってピースサインをしてくれるかしら」

「須藤さん、お尻の穴が良く見えないから、ピースサインを止めて、両手でお尻の割れ目を開いてくださるかしら」

ご近所の主婦達は次々と美人妻に卑猥なポーズをリクエストし、七海は恥辱に喘ぎながらもそれら一つ一つに誠実に応えていった。

そうして、美人妻の様々なヌードポーズを全員が一通り撮り終えると、撮影会の主催者である坂下は、七海に一糸纏わぬ姿のままベランダに出るよう命じ、哀れな若妻はついに極限の羞恥地獄に堕ちていくのだった。

■ 第一章 白昼のヌード撮影会

七海は悪夢にうなされながらベッドの上に横たわっていた。マンションの集会所で、大勢のご近所さん達が見つめる中、全裸のまま卑猥な踊りを披露し、挙句の果てに皆の見ている前で絶頂したあの時のシーンが何度も脳裏を過ぎり、七海の心を苦しめると同時に体を火照らせていた。

私、これからこのマンションでどんな顔して生活していけばいいの・・・。大勢の顔見知りのご近所さん達に秘部や紅薇だけでなくイク姿まで目撃されてしまった七海は、彼らと顔を合わせる事さえ恥ずかしくて、家の外に出ることさえ憚られた。

それでも、隣の部屋に住む主婦の坂下に恥ずかしい弱みを握られている以上、これから先もこのマンションで彼女の奴隷として生きていかなければならないのは確かだった。

前代未聞の集会から一夜明けた翌朝、七海は相変わらず坂下の命令を忠実に守り、カーテンを開け放った部屋の中で全裸で過ごし、いた。そして、キッチンで朝食の後片付けをしていた。そして、ピーンポーンという玄関のチャイムが鳴り響いた。七海は嫌な予感を覚えながらインターホンのモニターを覗き込むと、そこには坂下が映し出されていたのだった。一体何しに來たの・・・坂下の顔を見た瞬間、七海は思わず全身が凍り付きそうになった。それでも、坂下に逆らう事のできない七海は仕方なくインターホンに応答し、全裸のまま玄関へと向かうのだった。

「おはよう！」

七海が玄関の扉を恐る恐る開けると、坂下が満面の笑みを浮かべて挨拶をしてきた。

「お、おはようございます」



七海は片手で玄関の扉を支え、もう片方の手で豊かな乳房を隠しながら挨拶を返した。  
「実はね、今日の午後、マンションのご近所さん達が何人か集まってアナタのヌード撮影会をする事になったのよ」  
坂下は七海の部屋に入ろうとはせず廊下に立ったまま、ハキハキした口調でそう告げた。  
「えっ」  
七海は半開きになった玄関の扉から素っ裸の体を外の廊下に晒したまま、驚きの表情を浮かべた。  
「それでね、撮影会は私の家でやろうと思うから、裸のまま私の家に来てちようだい」  
坂下はハキハキとした口調で何とも恐るべき命令を七海に伝えたのだった。  
「そんな・・・」  
七海は、あまりに唐突な坂下の話に心が追いついていかなかった。七海の頭の中は昨夜の集会所での悪夢で覆われ、今これ以上の恥辱を受け入れるキャパなどなかったのだ。

「それじゃあ一時になったらウチに来てね。  
ちゃんど裸で来るのよ！」  
坂下は最後にそう強く念を押すと、笑顔のま  
まさつさと隣の自分の家へ戻っていった。  
七海は半開きになった玄関の扉から素っ裸  
の体を晒したまま、暫し呆然と立ち尽くした。  
昨夜、大勢のご近所さん達の前で死ぬほど恥  
ずかしい目に遭ったばかりだというのに、今  
日の午後に自分のヌード撮影会が行われ、そ  
こでまた辱めを受けなければいけないのかと  
思うと、どうしようもなくやるせない気持ち  
になった。  
私、このマンションに住むご近所さん達全  
員の奴隷になるんだわ・・。七海はそんな  
絶望的な思いに苛まれながら、なぜか下半身  
が疼くのを感じていた。両隣の部屋の住人に  
痴態を目撃され、彼らに脅されて服従を誓っ  
た時からあつという間にマンション中の奴隷  
になり、七海は言い知れぬ恐怖を抱くと同時

に、どこか興奮して感じてしまっている自分  
が、いることに気づき始めていたのだ。  
リビングへと戻った七海は、それからもう  
何も手につかなかった。素っ裸のままソファ  
に座り、カーテンの開け放たれた窓の向こう  
に見える空をボツと眺め、午後に行われる  
撮影会の事に思いを馳せた。  
一体どれほどの近所さん達が撮影会に集  
まるのか分からなかったが、昨夜の集会所の  
時と同じように素っ裸で恥ずかしいポーズを  
晒す自分を想像すると、七海は不意に秘部に  
手を伸ばしやり始めていた。  
「ああん」  
七海は空を眺めながら恥ずかしい声を漏らし  
妖しい妄想の世界に導かれていった。  
同じマンションに住む顔見知りの近所さ  
ん達に体の隅々までを鑑賞され恥辱に喘ぐ自  
分、素っ裸の恥ずかしいポーズをご近所さん  
達に罵られる自分、そしてご近所さん達の見  
ている前で絶頂する自分を想像すると、七海

はいっしか大きな喘ぎ声を放ちながら、部屋  
の中でオ○ニーに耽っていた。  
「ああん、私の恥ずかしい姿をみんな良く見  
てえ・・ああん」  
七海はそう叫ぶと、ソファに座ったままイツ  
てしまったのだった。  
部屋の中の時計は午後一時ちようどを示し  
ていた。七海は素っ裸でソファに座ったまま  
それを確かめると何度も深呼吸をして、高鳴  
る鼓動を必死に鎮めようとした。今朝、坂下  
から告げられた約束の時間になり、七海はこ  
れから素っ裸で隣の坂下の家を訪れなければ  
ならなかったのだ。  
どうか、大勢の人が集まっていませんよう  
に・・。七海は心の中でそう強く祈りなが  
ら玄関の扉をゆっくりと開いていた。ああ  
ん・・。七海は白昼のマンションの廊下に  
素っ裸で出ると、恥ずかしさに思わず喘ぎ声  
を漏らし、慌てて両手で乳房と股間を隠した

そして、脚を震わせながら隣の坂下の家の  
前まで歩き、そのインターホンを押したのだ  
った。  
「はい、今行くからちよつと待ってて！」  
インターホンから坂下の陽気な声が聞こえて  
くると、その声に混ざって他のご近所さん達  
の賑やかな声も廊下に響いてきた。えっ、も  
しかして、大勢集まっているの・・・。イン  
ターホン越しにざわついた部屋の中の様子を  
察した七海は、胸の奥から急激に不安が込み  
上げ全身を震わせた。  
「いらっしやい！」  
七海の前で玄関の扉が開くと、中から朝と同  
じ満面の笑みを浮かべた坂下が姿を現した。  
「ど、どうも」  
七海は両手で乳房と股間を隠しながら挨拶を  
すると、マンションの廊下に素っ裸で佇む不  
安から、坂下の家の中に逃げ込むように急い  
で入った。  
「皆さん、本日の主役の登場ですよ！」

坂下は七海をリビングに連れて来ると、すでに集まっているご近所さん達に大きな声で呼び掛けた。

「まあ、本当にスッポンポンで来たの。やつぱり須藤さんて本物の露出狂なのね」

「昼間から素っ裸でウロウロするなんて、最近の若い人は何を考えているんだか。でも、せつかくだから今日はその体を良く見せてちょうだい！」

「昨日もビックリしたけど、須藤さんて滅茶苦茶スケベな体しているわねえ。これじゃあ撮影のし甲斐があるわ」

ご近所の主婦達は、リビングに全裸で現れた若妻の体をマジマジと見つめながら、本日の主役を歓迎した。

「それじゃあ、とりあえずそこに立ってくれるかしら」

坂下はそう言ってリビングの中央に置かれた高さ三十センチほどの丸い台座を指差した。

「は、はい」

七海は震える声でそう答えると、両手で乳房と股間を隠したまま台座の上に昇った。とああん、恥ずかしい・・。台座の上に昇った七海は周りで大勢のご近所の主婦達に取り囲まれる形になり、激しい羞恥に悶えた。坂下の家には、なんと七海の想像を遙かに越える二十人近いご近所の主婦達が集まっていたのだ。彼女達の中には昨夜の集会に出席していたいなかった者達もいて、初めて見る若妻の卑猥な裸に酷く興奮している様子だった。―それでは皆さん、須藤さんにしてもらいたいポーズをあつたら、どんどんリクエストしてくださいね！―坂下がそう声を掛けると、集まったご近所の主婦達はそれぞれのスマホを手に持ち、全裸の若妻に向けて構えた。―須藤さん、とりあえず両手を頭の後ろで組んで、その大きなオツパイを良く見せてちよーうだい！―

一人の主婦がそう声を上げると、台座の上に立つ七海は、唇を噛みしめながら両手を体からゆっくり離し、頭の後ろで組んで見たのだった。  
「ワァー」  
若妻の形良い豊かな乳房が露わになると、ご近所の主婦達の間から感嘆の声が漏れた。  
「あぁん、見ないで・・・」七海は、その場に  
いる全員の視線が乳首に突き刺さるのを痛いほど感じ、恥ずかしくて堪らなかった。そのうして、周りからはスマホのシャッター音が響き渡り、七海は自分の剥き出しの乳房の写真が彼女達のスマホに次々と保存されていくの  
の  
を  
思  
い  
知  
る  
の  
だ  
っ  
た  
。



■ 海老沢薫 B L O G

・ ・ ・ 海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

■ 海老沢薫 Web 連載小説

『 清楚な美人妻 彩 27 歳 絵画モデル編 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 国民のペットへと堕ちていくヒロイン ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 女神の憂鬱 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675>

『 女教師 玲奈 25 歳 ー 女性教諭の前代未聞の不幸事 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186>

『 美人社長 里帆 26 歳 ー 若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885>